

息子よ

紀野一義

息子よ

紀野一義

きのかずよし
紀野一義

大正11年山口県萩市に生まれる。昭和23年東京大学文学部印度哲学科卒業。現在、宝仙学園短期大学教授、真如会主幹。

主著「永遠への愛」「心に問うこと」「四季の愛」「こころの故里」「風と光の国インド」(以上佼成出版社刊)「法華經の風光(全5巻)」
「般若心經を読む」「凜々と生きる」

息子よ

定価 一一〇〇円

昭和五十六年五月十一日 初版第一刷発行

著者 紀野一義

発行者 古川 司

発行所 株式会社 佼成出版社

東京都杉並区和田二丁目一(〒一六六)

電話(〇三)三八三―三一五一(代) 振替東京七―七六一

印刷所 三容堂印刷株式会社

製本所 大日製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

©Kanzoshi Kino 1981. Printed in Japan
ISBN4-333-01015-2 C0095

はしがき

私は世の常の若い父親とは違って、五十四歳で初めて長男真輝まさきの父親となった人間である。二年たって次男の珠輝たまきが生まれた。その時は五十六歳である。

従って私のこの記録は、かなり風変わりなものであるかも知れない。

もともとこの記録は、私が毎月出している雑誌『真如』の「人生論控え」の項の冒頭に書きつけてきたものをまとめたもので、ごく個人的なものである。父親はこうでありたい、という教育的な意図は全くない。二人の子供が大きくなった時に、おまえたちの幼年期・少年期はこうだったのだよ、と言って渡してあげる父親からの唯一の贈り物として私はこの文章を書きはじめた。文章と平行しておびただしいカラー写真を撮り、8ミリ映画を撮り、毎日の声をカセットテープに録音してある。息子たちは、この世に人と生まれてからの自分の成長の過程を、ドキュメンタリー映画を見るように確実に把握することができはるである。父親として私がしてあげられるのはそれくらいものだろう、と私は考えたのだ。

しかし、私はこの記録を書きつけている間に、実に多くのことをこの小さな息子たちから教えられた。私が教えるのではなくて、教えられたのだ。

その小さな『真如』誌を読む人たちは、私の思想や、仏教の捉え方や、生き方に共感している人たちだけで、その数もそう多くはない。ただ、どの人にも共通しているのは、雑誌が届くとまず、「人生論控え」冒頭の二人の子の写真を眺め、「真珠兄弟」というタイトルで書いている二人の子供についての私の文章を読む、ということであった。

大病院の総婦長をしている、子供のないある方は、「自分の子供のような気がして」と言われる。二人の子を育てている若い夫婦は、「うちの子とそっくりな成長なのでうれしくて……、でもお父さんはちよっぴり違います、忙しくてうちにあまりいないんです。でも、おれ、反省しなくちゃ、といつも言っていますの」と言う。まだ結婚していない若い娘は、「結婚して赤ちゃんができたなら、先生みたいに育てようと思って」と言う。それぞれに違っていながら、どこか共通したところがある。真輝も珠輝も、他人の子などとは思われていないのだ。千人を超える人たちから、自分たちの子のように思われているのだ。人の子として生まれて、これほどの幸せはないだろう。

繰り返して言うが、この記録は子供をどう育てるか、という本ではない。子供はそれぞれの親と、のっぴきならない間柄を持って生まれてくるのであり、他人ではどうにもならないのだ。他人の書いた子育ての本を読んで、ではうちでもあの通りに、などと考えるのは、あまりにも安易で愚かしい。

それぞれの親が、それぞれの家の風で育てればそれでよいのだし、それしかないのではないか。

私は鎌倉期に出た道元というすばらしい禅僧を尊敬しているが、道元は五十四歳で死んだ。道元の死んだ年に私は子供の父親となったのだ。

道元は唐の禅僧玄沙師備を尊敬し、玄沙の言った「尽十方世界、これ一顆明珠」の語を殊に愛した。

「この全世界は一つの輝かしい珠である」と言う。そして、玄沙も、道元も、また、一つの輝かしい珠である。真輝も、珠輝も、また、小さいながら、一つの輝かしい珠である。

しかし、また思うに、人の命の奥底に深いかなしみがあるように、この全世界という一つの輝かしい珠の中心にも深いかなしみがあるのだと思われる。仏教はそれを「根本無明」と呼んだ。

世界の中心に深いかなしみの根源がある以上、人として生きるわれわれの命の奥底に、どうにもならない深いかなしみがあるのは当然のことかも知れない。

かなしみは「悲しみ」であるとともに「愛しみ」でもある。私はこの二つのかなしみに促されてこの記録を書きつづけているのかも知れない。

私の敬愛する歌人吉野秀雄先生は、

称名に安心はなし 揺れやまぬ かなしき心促せば申す

と歌われた。未亡人の吉野登美子さんが、お仏壇の横に掛けて下さったこの歌の軸を見た時、私

は吉野先生の心底にある深いかなしみに烈しく搏たれた。お念仏すらも、この深いかなしみから来るのであった。

私にとっての二つの輝かしい珠である真輝と珠輝についてのこの成長の記録も、やはり深いかなしみから来るのだと思われる。読んで下さるあなたの心の奥深いところにあるかなしみは、どのような相すがたをしていることであらうか。

息子よ

目次

I 天からくるもの

9

夢

赤ん坊は天の音を聴いている

天からくるもの

II 希望の子

23

ハリール・ジブラーンのプロフェット

歎びと悲しみとはいっしょにやってくる

ボチはかわいそうに死んでしまいました

子を失える女人の歌

兵（つわもの）の血

川みたいにさらさらと

はるかなる呼び声

III 一歳の章

77

微笑合掌仏

多摩川の流れのよう

小さな仏さまと父と母

まさしく日本的な

透明な呼び声

集中力

Ⅳ 二歳の章

雪の降る夜に

私は風の声を聴いた

信楽の親子蛙

地獄耳にのみとり眼

チンボコ大将

イチバンスキナノハ、オトサン

次男誕生

どしたらヨカンベ

コンビューター・チャイルド

エフロン掛けて

Ⅴ 三歳の章

しちゅえいね

陽でなくてはどうにもならない

アトリエ・クロー

嵐の日に思うこと

京都の旅

たしゅけてエ!

尾生の抱柱の信

朝比奈老師の死

スターバト・マーテル

クロス・エンカウンター

重箱かついでエッサッサー

胸板突進激突大抱擁

Ⅵ 四歳の章

合掌チンピラ仏

人間にはオーラがある

今日から幼稚園

半遅の真輝

兄弟愛のエール交換

手のひらにあったものを

夢

昭和五十一年一月末のある朝、夢を見た。その夢は、海から急いで帰ろうとする私が、寺の塀とおぼしきところに手をかけたとたんに、その塀がぐらりと倒れかかり、こりや大変だとあわてた私がひよいと向うを見ると、その寺の広い板敷の向うでお坊さまが「上れ、上れ」と言っている。その板の間に坐ったとたん、向うの方で、可愛い女の子が何やら手に持って振っている。はて、あれは何だろうと眼をこらすと、なんとそれはお盆の灯籠なのである。灯籠といっても、黒塗の蒔絵まきえのついた三本の木の脚を組み合わせ、その上にこれも蒔絵のついた木の把手とってをはめこみ、中間に灯籠のような形の火袋をふくらませた上等のものである。

お盆になると私はこの盆灯籠を組み立てさせられた。この灯籠には芙蓉の花の絵が描いてある。それを少女は振っているのである。私はとっさに、あ、あの芙蓉の花の灯籠を持っているところを見ると、あのひとは寿々すず恵姉えさんだなと思った。このひとは大正十三年の九月に僅か九歳で夭逝ようせいした私の姉である。その時私は僅か二歳であつたからこの姉の顔を知っているはずはないのだが、お仏壇の中にいつもこの姉の写真が飾ってあつたので鮮明に覚えていたのである。

可愛くて、頭がよくて、私たち姉弟七人の中ではずば抜けた女の子であつたらしく、おやじ

は、私が中学生になった頃でもまだ、「あいつが生きていたらなあ」と言ったものである。「ほかがいるからいいじゃないか」と私は言いたかったのだが、とてもとても太刀打ちできる相手ではなかったらしい。大きくなったら、さぞ美しく、すばらしい女性になっただろうと思われる姉さんであった。

おやじは哀惜の情に堪えず、寺の庭いちめんに芙蓉の花を植えて、この姉、芙蓉院^{じゅふゐん}寿恵童女の面影を追っていたのであった。

私は夢の中ながら大声をあげて「寿々恵姉さんじゃないか！」と叫んだ。その少女はうれしうにうなずくではないか。私は、はっと気がついた。「そうか、家内のおなかの中に宿っている赤ちゃんを護っていてくれるのはこの寿々恵姉さんなのか、もしかすると寿々恵姉さんが生まれ変わってくるのじゃないか」と思った。そう思ったから私はすぐ大声をあげて、「寿々恵姉さん、そうなんだね！」と念を押すと、少女はいよいようれしそうな顔をして、ていねいに挨拶するなり消えていった。とたんに、背筋から胸にかけて、さわ、さわ、さわ、さわと、なんともいえない流れが電流のように走って眼を覚ました。その流れは、ずっと昔、津山の本蓮寺の客殿で、死んだばかりの友の霊に押さえつけられた時に私を襲ったあの身の毛のよ立つような流れを、もっと軽く、もっと爽やかにしたような靈波のようなものであった。

私がこの寿々恵姉さんの夢を見たのは初めてである。夢とはいえあまりにも鮮烈な、生々しい夢であった。この時私は、生まれてくる赤ん坊は、寿々恵姉さんの、果たさなかった生涯を代っ

て果たすことになる聡明な子供になるに違いないと思った。単純な話である。夢と現実と一緒にすることはあるまいと言われそうだが、私にとっては、こんな夢は「夢」であると共に「憧れ」であり、「ロマン」であると言ってもいい。それらは形に定まらぬものである。しかし、人の心を根底から揺り動かすていの底力を持ち、そこからさまざまなロマンが生まれるのである。

それから十七日目、昭和五十一年二月十七日の夜おそく、十一時二十六分に家内は長男の真輝（まさき）を無事に産んだのであった。

十七日の早朝、午前二時半頃に家内が身動きする気配で私は眼をさました。「どうかしたか？」と訊くと、「おなかが次第に痛くなってくる」と言った。「それじゃ朝になったら入院しよう」と言い、中野の女医の倉富孝子先生に電話した。このひとは深夜二時、三時まで起きて勉強するひとなのである。果たして彼女は起きていて、すぐに相談はまとまった。

朝五時半に起き、家内はいつものように食事の支度をちゃんとして、二人揃っておいしい朝食を頂いた。

いよいよ産む日までちゃんと働いていたといつも言っていた家内は、昨夜のうちにアイロンをかけるものは全部かけ、掃除も洗濯も全部終っていた。昔の女性は皆そうしたのである。この頃の女の人の中には六カ月すぎると里に帰ってしまう人がいる。実家だからだろう、のうのうとして太れるだけ太り、産む時には帝王切開して肥満した赤ん坊を取り出すことになる。あれでは産むのでなくて取り出すのではないか。

赤ん坊は、生まれる時、あの狭い産道を必死でくぐり抜け、生まれ出た時は顔がひしゃげてしまっているという労苦を味わってこの世の人となるのでなければならぬ。この時の労苦に堪える努力が、この赤ん坊を根性^{こんじょう}あるものにするのである。

家内はごく昔風の女である。喜びも悲しみも夫と共に味わい、生きる時も死ぬ時も夫のかたわらにありたいと願う女である。里に帰って産むことなど逆立ちしてもできない女である。彼女は、私の母が若い時にした通りに、産むその日まで私につくして、そして、産んだ。

朝七時、真紅の太陽の最初の閃めきが雑木林の梢をピンク色に染める頃に家内を車に乗せて走り出した。西武新宿線新井薬師駅のすぐ前の野原病院まで一時間で走り抜け、八時には入院することができた。

この病院の大先生の野原氏はベテランの産婦人科医で、倉富先生と私との共通の友人である。さっぱりした野人肌の山口県人である。息子さんの四郎先生は、若いがいっしょにしている。飄々としていてぶっきら棒なところが実にいい。この二人の先生の病院に家内をあずけて私は大学に講義に行き、そのまま家に帰った。

その夜、十時頃に家内は分娩室に入り、十一時二十六分に男の子を産んだ。三千五十グラムの丈夫な男の子であった。生まれてすぐ、赤ん坊の飲んでいたものを吐かせるが、それを分娩台の上から家内が見ていると、赤ん坊は大きなくしゃみをしてパッと眼をあけ、のぞいていた家内の顔を真正面からジロリと見たそうである。その瞬間、赤ん坊はシャアッと小便したそうである。倉富